

シャレオなクリスマスの過ごし方 “tawaki”

皆さんにとって、クリスマスはどんな日ですか？ステディな相手がいる人にとってはどこか胸が躍る日でしょう。逆にそうじゃない人にとっては少しセンチメンタルな気分になるのではないのでしょうか。何も感じないよ、という人がいれば枯れすぎかもしれません。

クリスマスを、資本の論理が先行した「悪しき消費文化」と見る向きがありますが、一年のなかで、思い切った美味しい物を食べたり、大切な人を喜ばせる演出に精を出す日ってそうないですよね。クリスマスは現代における「ハレの日」としてすっかり社会に定着しているわけで、経済効果のみならず、人々に様々なプラスの効用をもたらしているのではないのでしょうか。

僕自身はクリスチャンではないですが、イエス・キリストの誕生を祝うクリスマスという聖日がわりと好きなんです。今は亡き僕の親父は、学生時代にグリーンクラブというコーラス部に所属していたということもあって、クリスマスには家族に聖歌を歌ってくれたっけ。おもちゃとかのプレゼントとかもいいますが、こういう無形のプレゼントは、今となればとても良い思い出です。

さて、今年のtawakiのクリスマスといえば、とてもシンプルなものでした。というのも、子どもが産まれて間もないため、外出せずに家でしっぽり過ごしたのです。案外これが乙なもので、誰にも邪魔されず手作りの食事とワインに舌鼓を打つことができました。もちろん選りすぐりのクリスマス音源がホーム・クリスマスに花を添えたことは言うまでもありません。今年、僕が家でよくかけたクリスマス・アルバムを紹介します。

①山下達郎 / season's greetings (1993)

達郎のクリスマス・アルバムが悪いわけありません。定番曲、賛美歌を中心に構成されたアルバムです。演奏はいたってシンプル。聴き所は何と言っても達郎の声を多重録音したコーラスワークでしょう。達郎のペンによる名曲「クリスマス・イブ」の英語ver.も収録されています。

②The Isley Brothers / i'll be home for christmas (2007)

アイズレーといえば、ファンクを想起する人がいますが、「ビトウィーン・ザ・シート」に代表される官能的なバラードが得意なことも周知の事実。このアルバムの路線はもちろん後者。チョコがとろけたような甘美なロナルド・アイズレーの歌声は聖歌さえ妖しく濡らしてしまう魔力に満ちています。

③Jackson 5 / the christmas collection (1970)

アイズレーとは対照的に明るく楽しいクリスマス・アルバム。もちろん絶頂期のJackson 5だけあって、メロディーやアレンジはとても気が利いています。マイコーの若さに溢れる純真な声は愛せずにはいられません。ジャーマインがメイン・ボーカルを担当する大人っぽい曲も◎。

④James Taylor / james taylor at christmas (2006)

70年代にアメリカでSSWとして人気を博したジェームス・テイラーが近年クリスマス・アルバムを作りました。60年代に青春時代を過ごし、繊細さゆえにドラッグに溺れたお兄さんも、今やすっかり落ち着いた中年になり、禿隠しのために帽子が手放せなくなっているようです。そんなオヤジだからこそ奏でられる円熟味がこのクリスマス・アルバムの持ち味。かつての恋人、ジョニ・ミッチェルの代表曲「リバー」のカバーが秀逸です。



極私的ハウス噺 “tawaki”

Leroy Burgessの巻

いつもはitaru wakuiがこのコーナーの担当なのですが、今回は特別にtawakiがペンを執ります。itaru wakui氏ほど含蓄に富んだ文章は書けませんが悪しからず。さて、皆さん、リロイ・バージェスというアーティストをご存知でしょうか？僕はcollective常連客の佐藤君に‘throwback : harlem 79-83というCDを貰って以来、リロイ・バージェスの魅力の虜になってしまいました。彼の経歴を調べてみると、古くはBlack Ivoryというソウル・グループのメンバーだったのです。その男が後年、ディスコミュージックのクリエイターへと見事に転身したわけですね。近年、リロイ・バージェスの再評価の機運が高まっているようで、立て続けに彼の音源がCD化されています。いずれもアンダーグラウンドかつ都会的な雰囲気がかんぱんぱん漂う音源で、ダンクラファンはもちろん、ハウス、ブギー、ソウル、エレクトロ好きにはマスト・オブ・マストです。今回は彼の足跡を辿ることのできるCDを3枚紹介します。いずれもsoul brotherというレーベルからのリリースです。いつ廃盤になるかわからない代物なので早めに入手されることをオススメします。

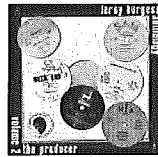
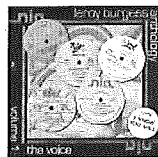
①V.A. / leroy burges anthology vol.1 voice (2001)

②V.A. / leroy burges anthology vol.2 producer (2002)

いかんせん、リロイ・バージェスは、LoggやAleemをはじめとする、様々な名義やグループを同時代にかけもちしているため、自身の名前が流通しにくいという欠点も持っています。しかし、2枚のアンソロジーを聴けば、彼がダンス・ミュージック史におけるレジェンドであることがすぐにわかると思います。この2枚にはお馴染みのダンクラ音源が多数収録されており、今回リロイ・バージェスの名前を初めて知った人も、過去にフロアで彼の楽曲を聴いていたことに気づかされるでしょう。

③Leroy Burgess / throwback : harelem 79-83 (2007)

上記2枚よりオススメなのが‘throwback : harlem 79-83です。アンソロジーが典型的なディスコであるのに対し、こちらはテンションを適度に抑えたアーバン・メロウ・ソウル。12曲の未発表音源はどれも高品質でエレクトリックなキーボードのメロディーが何とも渋いブギー音源です。竹内まりやみたく、似通った曲が多いですが、そこはご愛嬌。



information

今年、足を運んでくださった皆さんに感謝！
次回のcollectiveは、2009年の春を予定しています。
詳細はホームページにてご確認ください。

http://www.geocities.jp/collective_web/

press collective

皆さんこんにちは。2008年も残りわずか。いかがお過ごしですか？ 年末なので、今年の思い出をふり返ってみなさんにお話ししようと思います。9月のある日、楠田君（a.k.a.collectiveの侍）から合宿へのお誘いメールが飛んできました。行き先は山。しかも修験道の山、山上ヶ岳（1719M）です。僕は基本的に快楽に耽溺することを好むタイプで当然修行などしたことはありません。とはいえ登山なんて小学生以来。「楽しそう」ということで、都合のついたメンバーで修行に出ました。

山上ヶ岳は、現在も女人禁制の伝統を守る山。登山道の入り口には女人結界門があります。颯爽と門をくぐり山に入って行くメンバーたち。入口からしばらくは杉の林が続きます。まっすぐな杉の木がミニマルに続く緑色の世界はクールです。とはいえ、しばらく続くとちよつと飽きます。仕方ありません。それがミニマルというものです。徐々に階段の道になってゆきます。だんだんみんな息がはあはあしてきます。1時間に1回ほどのペースで休憩を入れます。ちよつとよいポイントポイントで、山小屋があり休憩。しかし、だんだん疲れもたまってきます。そんなところに延々と続く階段の道・・・みんなでせいでいい言いながら登りきって休憩。そこで食べたハッピーターンとカリカリ梅のありがたさと言ったら。たびたび思いましたが、こんなところに階段を作ってくれた人がいるわけですね。ありがとうございます。

そんなこんなで約3時間半かけて、頂上の手前にある宿坊に到着しました。宿坊の食事は精進料理。メニューは、昆布豆、高野豆腐と昆布の炊いたん、昆布の佃煮、とろろ昆布のみそ汁、ご飯。質素、ということを書くまでもなくわかりますが、こうして改めて書いて気づいたのは、おかずが昆布だらけだったということ！とはいえ、1つ1つはとてもおいしく、みんながつがつご飯3杯食べました。ご飯を3杯も食べたのはいつ以来だろうか。ご飯を食べたら、日頃の睡眠不足と登山疲れで僕は爆睡でした。

翌朝、日の出前におき、みんなでもう少し登ったところにある大峰山寺へ行き、ライジングサンを拝みました。とてつもなく美しい雲海と朝日。その光景のすばらしさは圧倒的であることは言うまでもありませんが、そこに建っている大峰山寺本堂のクールな外観もまたすばらしいものがありました。標高1700Mにこの場所に、誰がいつどうやってこんなものを建てたのでしょうか。宿坊にて晩ご飯とほぼ同じメニューの朝ご飯を食べ、その後宿坊の方に、裏行場という修行の場を案内していただきました。さすがに「裏」がつくだけあって、ガチです。特に前知識なしで行っただけにびびりました。完全にロッククライマーが上るような岩場を登るのです。命綱もセーフティネットもありません。宿坊の方が足や手をかける場所などを教えてくれますが、足がすくみ腰が引けます。途中からもう勘弁してくれと思いましたが、戻るに戻れません。いくつもの岩場を登りめぐり、最後の難関の岩場。完全に数百メートルはあろうかという断崖絶壁の岩の外側に岩に捕まりながら周るという修行。もう確実に死、遺体回収不可能、な世界。ひいひい言っでなんとか周って、修行を終えました。

修行の後に立ち寄った、「お花畑」と呼ばれる頂上付近の開けた場所がとても印象的でした。背の低い笹が広がり、風がさらさらと通り過ぎて行くだけの、静かで、美しく、しかし殺風景でもあり、明るいきれどことなく怖いような、安らぎと不安が同時に感じられるような、独特のスピリチュアルなスポットでした。こんな感覚を感じさせる場所はちよつと他に見当たりません。この空気を感じられたのも修行のおかげかもしれません。そろそろ紙幅も尽きてきました。僕のお話もこれくらいにしておきます。それでは世俗を離れ修行でパワーアップしたcollectiveをお楽しみください。最後に、皆さま今年もありがとうございます。良いお年を。

※<http://blog.livedoor.jp/djkengo/archives/51473079.html>に写真がありますので、興味のある方はぜひご覧ください。

2008年、皆さんにとって良い1年だったでしょうか？ 世の中は不況の嵐が吹き荒れ、のんびきならない状況になっていますが、幸い、僕は何とか無事に年末を迎えることができました。こんな世相ですと、ついつい財布の紐を締めがちですが、趣味に費やす時間と金は惜しまたくないもの。この2008年、緊縮財政ではありましたが、僕は過去最大級に音源をチェックしました。しかも新譜をたっぶり。てなことで、今回はtawakiが2007年から2008年にリリースされたオススメのジャジー音源をいくつか紹介したいと思います。

①Esperanza Spalding / esperanza (heads up)

沖縄に出張しているとき、レンタカーのラジオから流れてきた曲に反応し、即購入したアルバム。このエスペランサ・スポルディングは、歌える女性ジャズ・ベーシスト。ミシェル・ンデゲオオチェロも歌える女性ジャズ・ベーシストですが、ミシェルがタフでクールな感じのアーティストであるのに対し、エスペランサは可憐で軽やかといった表現が適切でしょうか。アルバムの冒頭を飾るミルトン・ナシメントのカバー‘Ponta De Areia’が秀逸です。

②Herbie Hancock / river : the joni letters (verve)

作品ごとにカラーを変えてくるハービー。2000年代になってもいい音源を作り続ける巨匠に最大級の賛辞を送りたいと思います。さて、この新譜。タイトルからもうかがえるように、ジョニ・ミッチェルのカバーアルバムです。死んでもいいのにトリビュートのアルバムを発表されるのって、当人にとってはどんな気持ちなのでしょう？ とまあ、このアルバム、ヴォーカルの人選がすごく良いのです。ノラ・ジョーンズはもちろん、コリーヌ・ペイリー・レイの起用がすばらしい。もちろんインスト曲も充実して、死ぬまで愛せる好盤です。ジャケ写真は、中尾彬へのオマージュか？

③Jazz Liberatorz / clin d'oeil (kif)

最近のヒップホップ事情を概観すると、アメリカ東海岸を席卷した90年代中頃のジャジーな雰囲気をも発展的に継承しているのが、アメリカ以外の国にみられる傾向なんですね。日本のGagleやイギリスのForeign Exchange、カナダのThink Twiceなど、ハイレベルなアーティストが続々登場しています。そして今回紹介するのはフランスのヒップホップユニットです。上記のどのグループより、忠実にミッドスクールのジャジーな雰囲気を継承しており、なおかつオリジナリティを確保した充実盤。Sadat x (Brand Nubian)、Buckshot (Black Moon)、Fat Lip (Pharcyde)といった、ツボを心得たラッパー使いが粹です。ジャケはblack jazzへのオマージュ。売れる作品の作り方を心得ています。

④Robert Glasper / in my element (blue note)

たぶん、読者のほとんどがこの素晴らしいジャズ・ピアニストのことを知らないではないでしょうか？ そもそも、ジャズの新譜を小まめにチェックしている人なんてそうそういませんよね。かくいう僕も然りです。ただ、このロバート・グラスパーに関しては、‘j dillalude’ という亡きjay deeへのトリビュート曲がクラブジャズ系のDJに広まり、僕の耳にまで届いたという経緯があります。j dillalude 目的で手に入れたこのCDですが、とてもラッキーだったのが、当該曲以外の曲が抜群に良かったということ。期せずして優れた現代のジャズ・ピアニストに出会えた興奮を何と伝えていいのか言葉がみつかりません。



今年もあとわずか。どうしても一年を振り返るこの頃ですね。というわけで、今年僕が一番入れ込んでた歌手(手選れ)のことについて書きます。何が手選れかと申しますと、このORITOさんという方は今年の2月に亡くなられたんですね。享年43歳。マック鈴木型シンガー。日本では売れず。僕のORITOとの出会いは今年の5月ぐらい。友人の声かけで彼のよく知るソウルバーへ行ってはみたものの、そこは閉まっていて、同じ雑居ビルの中にある‘Marvin’ というバーを見つけ、入るかやめるかかなり迷いました。だってその店の看板に描かれたミカルな黒人のオッサンがタモリ面下げて「ハッハッハ、ベエベイ！」って言ってるもんですから。「ベイベー」ならまだしも、「ベエベイ」ですからね。

入ってみると、普通のバースタイルではなく、なんか統一感のとれた客層で、なんかのライブの映像が流れていて、それを皆が見ている。酒は二の次のような、あくまでもテレビ画面が主役で。それが、故ORITO氏の追悼DVD鑑賞会だったのです。最初は、どこの誰かわからんけど、とりえず見ておこうかてな感じで見ていたんですが、歌がクソうまい、自分の持ち歌の途中でディアンジェロのブラウンシュガーを挟み込んだり、さらに歌の途中で語り始めて、会場の特定の女性客に狙いを付けて口説きに行き失敗して笑いをとるなど、ライブでのあらゆる立ち居振る舞いを見ていくうちにこのオッサン、ただものではないと感じている自分に気づきました。

字数に限りがあるので、ぼちぼちこの人の経歴を。名古屋生まれで、デビューは31歳、サザンソウルの本場メンフィスで、アル・グリーンを世に知らしめたプロデューサーと言われているウィリー・ミッチェルのプロデュースによるアルバム「ソウルジョイント」。もちろん、全曲英語の歌なのですが、心の準備なしで聴けば、日本人が歌っているなんて信じられないぐらいの歌唱力。ここにはアル・グリーン「レッツ・ステイ・トゥゲザー」のカバーを収録。メンフィスの名誉市民になって「ニュースステーション」で特集されたり、「タモリの音楽は世界だ」に出演したり、日本でもデビュー当時はかなり注目されていたようです。

個人的にはORITOが帰国以降、日本語で歌いだした中期、後期が面白いと思っています。迷いとその後吹っ切れ具合を感じることができるのがそのわけです。剥き出しの感情を率直に綴る楽曲からはORITOそのものの人生が見えてくるような気がします。会ったこと、いや、実際に生きている姿を直に見たことすらないのでそう思われるのはなかなか無いことです。

死後にリリースされたラストアルバム「団子と珈琲」では、表現としての「剥き出し」をやりすぎて、極めて私的な現実から、妄想の世界に至るまで、もう全て出し切ってしまったんじゃないかという気にすらさせられます。このアルバムは前半に書いた魅力的なライブのステージングもわかる内容になっています。時期を同じくしてリリースされたベストアルバム「イモータル・ソウル」では代表曲が時系列にそって収録されており、ここまで書いた道りがわかる内容となっています。まずはこちらからといった感じですが、故人を偲ぶレビューになるとしんみりした空気が流れるものですが、ORITOの歌は最終的には明るかったり、バカっぽいのも結構あります。99年作のDJ feel goodでは「見栄と照らいは捨てればいい さあ皆の衆、踊ればいい」なんてフレーズも。その通りですね。ORITOさん、安らかに。

